

野世英水・加藤斗規編『近代東アジアと日本文化』（柴田幹夫先生退官記念論文集）

（銀河書籍、二〇二一年七月三一日） 抜刷

日中戦争期における鉄禅の対日協力

— 華南日華仏教協会と国際仏教協会華南支部 —

大澤 広嗣

日中戦争期における鉄禅の対日協力

—— 華南日華仏教協会と国際仏教協会華南支部 ——

大澤広嗣

一 本論の目的

「現代の支那仏教界に二人の傑僧があると言はれてゐる。一人は大虚和尚であり、一人は鉄禅和尚である」^{*1}。これは、一九四一（昭和一六）年に、日中戦争下の中国大陸を旅した、歴史学者中村孝也の随筆からの一文である。広東省広州の六榕寺住持であった鉄禅を訪ねて、三度目でようやく拝謁できた喜びを記している。

当時にこの兩名の僧侶は、斯界に知られた存在であった。太虚は、日中戦争では抗日の立場をとり、現在では民国期の四大高僧の一人として、虚雲、印光、弘一と共に評価される。そのため、太虚については現在まで中華圏を中心に多くの研究が蓄積されてきた。

一方の鉄禅は、日中戦争期に対日協力政権である汪兆銘（号・精衛）政権の側に就いた。戦後は中華民族を裏切った「漢奸」とされ、裁判に掛けられて収監中に死去した。中華圏での規範的な立場の研究からは糾弾の対象であったが、日本との具体的な関係は学術的に明らかにされていなかった。

近代日中の関係史のなかで、対日協力を行った宗教者の研究は、解明されつつある^{*2}。日本による中国での占領

地対策の一つに、仏教が重視された。日本側の思惑で動かされた鉄禪について、同人が関与した華南日華仏教協会及び国際仏教協会華南支部の設立経過と活動を論じることで、日中戦争期の日本による中国仏教の利用を明らかにすることが本論の目的である。なお本論は、中国側の史料を積極的に参照すべきであつたが、一般の世界的な感染症拡大の影響で国内外での調査が出来ず、中間報告に留める。

二 問題の背景

日中戦争期には、日中宗教者の親善と連携を目的とした、複数の宗教連合組織が設立された。華北では北京の仏教同願会や大同の普化日華仏教連合会、華中では上海の中文宗教大同連盟を始めとして、各地に対日協力の組織が立ち上がった。華南では、広州の華南日華仏教協会及び国際仏教協会華南支部があり、鉄禪が代表を務めた。

鉄禪（一八六五〜一九四六）の略歴について、まずは日中戦争期までを見る。広東省番禺に生まれ、俗名を劉秀梅といった。早くから書画を好んだという。一八八四年には黒旗軍に参加し、鎮南関之役にて、フランスのベトナム侵略に抵抗した。この集団は、太平天国の乱世の時に天地会の反乱に参加して失敗した、客家出身の劉永福が率いたものである。故郷に戻った後に、妻子が没し、生活が困苦ゆえに広東省広州にある六榕寺の僧侶となり、やがて住持となった。一九〇三年には寺院の財産を投じて、軍の将官養成機関である黄埔武備学堂の卒業生を日本留学に派遣した。これにより清の光緒帝から褒美を受け、「清修忠愍」の書が贈られたという。しかし旧態依然の清王朝を改める共和制に目覚める。同じ広東出身の孫文を知り、その革命を支援するようになった。返礼として「平等 自由 博愛」と「闡揚佛教」の書を受けた。中華民国の建国後は、広東省仏教会を組織して会長となる。鉄禪は、武術の達人でもあった。

次に、鉄禪をめぐる日中関係の展開を見る。一九三七年七月の盧溝橋事件により、日中戦争が起きる。日本軍は一九三八年一〇月に、広東省広州を占領した。華南日華仏教協会が一九三九年一月に成立して、後に鉄禪が会長となる。汪精衛を主席とする中華民国国民政府が、一九四〇年三月に南京にて成立する。抗日を主張した蒋介石と分裂した汪は、日本側の策略により、対日協力の政権を樹立したのである。汪政権は、地方政府として広東省政府を同年四月に設置した。日華基本条約と日滿華共同宣言が、一九四〇年十一月三〇日に南京において調印する。これにより、日本が汪精衛政権を正式承認した。汪精衛は、過去に遭った暗殺未遂の古傷悪化から名古屋帝国大学病院に入院したが一九四四年一月に死去した。政権は陳公博が継承するが、一九四五年八月の日本の敗戦と共に、政体は終焉する。

鉄禪は、日本に二度訪れている。第一次の訪日は、広東省政府の要請で渡航したものである。側近の謝為何らと共に、華南日華仏教協会の会長として一九四〇年八月から九月にかけて各地を訪問した。訪日中に、学術団体である国際仏教協会を知り、帰国後は同会の華南支部を組織する。

第二次の訪日は、「大東亜仏教青年大会」に参加するためである。一九四三年七月に、東京丸ノ内の大東亜会館（現・東京会館）で同大会が挙行され、鉄禪などアジア各地の仏教指導者が参加した。

続いて、鉄禪が代表を務めた仏教団体の組織と活動について論じていく。

三一 華南日華仏教協会の成立

(一) 成立の経緯

華南日華仏教協会は、一九三九年一月六日に成立した。同年二月五日に広東省広州市恵福東路にある大仏寺で、

日中の僧侶三百名が参列して盛大に発会式が行われた。式では、戦禍を逃れた香港や南洋、ベトナム、ビルマ等への避難民に対して、広東への帰還を勧める電報発出が決議された。また戦禍で没した日中両軍の将兵と中国民衆の慰霊祭を行った。⁴

協会の設立後、現地の僧侶や住民の慰撫が進んだ。中国人僧侶の日本語講習、日中僧侶の共同読経による日常法要、市民への治療事業が行われた。同年三月二一日には大仏寺で慶祝広州更生法会が開かれ、三百人の日中僧侶や官公署要人、日本領事が参列した。⁵

日本側は、関与を強めた。明治天皇の馬事奨励の故事にちなみ、一九三九年度から四月七日が国民行事「愛馬の日」となった。政府や民間馬事団体による各種行事のほか、財団法人仏教連合会主催の「支那事变軍馬祭」が開かれた。これに先立ち、日本仏教五六宗派の宗務総長は連名で、華南日華仏教協会など中国側の宗教連合組織に対し、祝典の意義を通知したという。⁶

第二回総会が、一九四〇年二月一八日に大仏寺で開かれた。役員の改選が行われた。日本側は副会長が片山正乗となり会長事務取扱も兼ねて、他に幹事の五名が選出された。中国側は副会長と幹事四名が推された。⁷この時に、副会長は日中双方から選出しているが、会長は空席であった。当然ながら会長職は一名である。日中での會長人事の折衝があったが、決定に至らず、当面の間は空位として妥結したものの、會長候補の鉄禪が広州での戦禍を避けて久しく避難していたことが理由にある。

日本側の片山正乗（一八九九〜一九七二）は、重要な動きをした人物である。山口県豊浦郡豊浦町（現・下関市）の真宗本願寺派（現・浄土真宗本願寺派）心光寺の出身であった。龍谷大学と米国のハミルトン大学に学んだ後に、米国各地で開教使として活動した。一九三九年四月から一九四〇年一二月まで西本願寺上海別院内の中南支開教事務所で賛事事務取扱として、開教総監の小笠原彰真を支えた。また一九三九年一〇月からは広東出張

所駐在も兼ねた。

片山による組織管理の手腕は、華南日華仏教協会の設立だけではない。広東特務機関との協同で、一九三九年一月一〇日に広東で宗教連盟を結成したのである。⁸ 加盟者は日中の仏教者、天理教、キリスト教の旧教と新教などである。キリスト教の牧師二五人は全員が西洋人であった。

このように片山は、行動力を持っていた。戦後の昭和二〇年代に西本願寺の改革運動を目指す、教団批判者会の主幹であったことを考えると、⁹ 政治的な才覚を持つ人物であった。

(2) 鉄禅の第一次訪日

一九四〇年に汪精衛政権下の広東省政府は、華南日華仏教協会に日本訪問を依頼した。なぜ鉄禅が、渡日することになったのか。その理由の一つが、鉄禅は「新政府主席代理汪精衛氏のお師匠さん」¹⁰ であつたからである。

仏教は日本と中国に共通し、鉄禅は中国の高僧であり、汪精衛の仏教の師であることから、親善と提携の工作を進めるための適任者であつた。

また仏教界から政権側への働きかけもあつたのではないか。鉄禅が、「民国ではこの三十年來仏教が民国政府に歓迎されなかつた」¹¹ と語るように冷遇されていた。鉄禅の仏弟子である汪精衛が新政権を樹立させたゆえに、中国仏教界は存在を示そうとしていたのではないか。

派遣を前に、空席であつた華南日華仏教協会の会長職に鉄禅が就任した。渡日に際して、日本軍の将官、広東総領事館、広東市長から推薦を受けて、協会の副会長の片山正乗と参議の謝為何が帯同することになった。

在家仏教信者の謝為何は、鉄禅の弟子であり最側近の人物であつた。¹² 謝は、かつて日本に留学して明治大学政治経済科に学び、滞在中に関東大震災を経験したという。その後は帰国して、派遣時には中央陸軍軍官学校広州

分校教官と広東大学講師の職位にあった。一九三二年に日本でラス・ビハリ・ボースの『革命の印度』が出版されると、謝は中国語に翻訳した。¹³

一九四〇年夏に実施した鉄禪の訪日旅程（全三二日）は、次のとおりである。¹⁴ 鉄禪は七〇歳代半ばの高齢ではあるが、精力的に要所を歴訪したことが伺える。

八月九日、航空機で広州発、台北着。片山正乗と謝為何が同行。

八月一〇日、台北の各寺院を訪問。

八月一日、基隆港から、客船の香取丸（日本郵船）で出発。

八月二日、神戸港着。同地の華僑団体や仏教界の要人らが出迎え。

八月一四〜一七日、京都滞在。宿舎は都ホテル。龍谷大学と西本願寺（真宗本願寺派）、東本願寺（真宗大谷派）、知恩院（浄土宗）、滋賀の比叡山延暦寺（天台宗）等を訪問。杭州日華仏教会から大谷専修学院に留学中の釈心光と釈典は、鉄禪の東京行きに際して同行と通訳を務めた。

八月一八日、東京駅着。宿舎は築地本願寺（真宗本願寺派）。

八月一九日、宮城遙拝。代々木の明治神宮と九段の靖国神社を参拝。霞ヶ関の外務省と有楽町の東京市役所を訪問。芝の増上寺を参拝。永田町の陸軍省と霞ヶ関の海軍省、興亜院を訪問。文部省で茶会。日本橋の中華料理店「偕楽園」で須磨弥吉郎（外務省情報部長）主催の晩餐会。

八月二〇日、本所の震災記念堂を参拝。大久保留次郎（東京市長）の招きで清任公園にて午餐会。本郷の東京帝国大学医学部附属医院では、坂口康蔵から持病の糖尿病と高血圧の診察。興亜院文化部長で衛生学者松村 盡の紹介による。上野の帝国博物館を訪問。興亜院文化部主催の晩餐会。

八月二日、浅草寺（天台宗）と浅草本願寺（真宗大谷派）を参拝。上野の寛永寺（天台宗）にて財団法人仏教連合会及び興亜仏教協会共催の晩餐会。

八月二日、海軍横須賀鎮守府を訪問。鎌倉の史跡参観。横浜の総持寺（曹洞宗）で泊。

八月二四日、東京駅発。以降、福井の永平寺（曹洞宗）、奈良の東大寺（華嚴宗）、三重の伊勢神宮を参拝。

八月三十一日、和歌山県の高野山金剛峯寺（古義真言宗）を参拝。

九月一日、京都着。

九月二日、京都深草の陸軍第一六師団長の石原莞爾を訪問。都ホテルで、ラジオの国際放送を録音、題目「新体制下の日本の姿を見て」。

九月一日（出港前日）、神戸の中華料理店「大東樓」にて神戸中華総商会の招待で会合。

九月一日、神戸港発。後日、台北着。

九月九日、航空機で台北発、広州着。

鉄禅が、来日時に語ったことは、「日本ははじめてだが光緒卅（一九〇四）年に廿数名の青年学徒を日本に留学させたことがありそれを通じて日本はよく理解してゐます、当時留学させた青年たちは帰国後革命に参加した連中ばかりです、孫文はじめ志士たちとも深い交りをしてゐたが、当時から東亜の平和は日支提携によらねばならぬと考へてゐた¹⁵」という。上陸した神戸は、かつて孫文が神戸高等女学校の講堂にて大アジア主義の演説をした地ゆえ、鉄禅は思いを馳せたに相違ない。

先の旅程から、広東省政府が派遣した政治的な意図が伺えるのは、陸軍省と海軍省、興亜院であるが、日本政府への工作の内実は詳細ではない。



図1 絵葉書「南支広東 日本総領事館及六榕塔」。「広州中央憲兵分隊検閲済」とあり（大阪府高槻市、浄土真宗本願寺派正徳寺蔵）

八月一九日の須磨弥吉郎（一八九二～一九七〇）との晩餐会は、日中外交の意図が含むように見えるが、実際には旧知を暖めるものであった。外交官の須磨は、中国勤務が長く、そのうち一九三〇年から二年余り、広東で総領事代理を務めた。

須磨によれば、広東の「公邸で毎週水曜の午後に集まる文人墨客の中に……鉄禅大師もいた。この人は書画ともに現代切つての大家であったが、ぼくとは特に親しくなった」¹⁶という。文人趣味の須磨は、勤務で多忙の最中にも、鉄禅らと親交を重ねた。「当代中国書家の大御所である沈演公や……鉄禅老師と、どれほど忙しい来往を続けたか知れなかった。共産軍に痛めつけられた後、さらに広東国民政府の誕生で、混乱を重ねた広東生活と政情の裡に、もし息抜き所があったとすれば、それは鉄禅老師との交遊であった」¹⁷と回顧する。鉄禅の書画の技巧はもちろんのこと、宗教者としての精神性に、須磨は惹かれたのである。

来日した鉄禅を囲む晩餐会に出席したのは、井上

正夫（俳優・書家）、岡本一平（漫画家）、尾上八郎（号・柴舟、歌人・国文学者）、小野賢一郎（号・燕子、俳人）、春日井柳堂（詩人）、小杉放庵（画家）、呉清源（棋士）、中村不折（画家）、村松梢風（小説家）、山田正平（篆刻家）、吉川英治（小説家）、和田三造（画家）、それに仏教界から倉持秀峰（新義真言宗智山派宗務長）、祥雲晚成（財団法人仏教連合会主事、曹洞宗）、通訳は岩村成允（外務省）など二十余名であった。

会合は須磨の私的な主催で、幹事役は小野賢一郎が務めた。^{*18} 小野は、須磨と交際があり調整を頼まれた。文人かつ高僧に相応の会合にすべく、小野は須磨と共に人選を進めた。会場となった日本橋の偕楽園は、東京で初めて中華料理店といわれ、この店は小野が推薦した。宴席の床の間には、黄派の南画家として有名な鉄禅から、須磨に贈られた自筆の詩と絵の掛物の二軸が掛けられた。^{*19} 会席では精進料理が振舞われたが、その秀逸の菜皿に、鉄禅は讚嘆したという。^{*20}

四 国際仏教協会華南支部の成立

（一）成立の経緯

鉄禅は、日本滞在中に国際仏教協会を知る。同会の活動に賛同して、広東にも拠点を置くことを発願したのである。

そもそも協会は、同会で作成した外国語による仏教研究書や仏教美術に関する図書を、日本滞在中の鉄禅に贈呈した。鉄禅は、「かゝる立派な出版に依て仏教の国際的普及、交流に協会が多年努力してゐることは真に有意義敬賀す可きであり、自分は同協会広東支部を創設して仏教による日華の親善提携に尽力し度い」との構想を抱き、財団法人仏教連合会を介し、協会に意向を伝えたという。協会では、会長の井上哲次郎などの幹部は協議を

行い、鉄禪に名誉会員の称号を贈り、支部の代表は鉄禪、副代表に謝為何を推薦した。

協会本部側でも思惑があった。もともと国際仏教協会は学術団体であったが、日中戦争を境に、アジア諸地域へ仏教を通じた文化工作を担う組織に転換した。²² 協会は、中国華南方面の工作活動を、華南支部に託そうとしていたのである。表向きは、日中の仏教親善であるが、日本軍の特務機関が設立と活動に関与したことは否定できない。後述する華南支部の設立に際して、支部の賛助人に広東特務機関長の氏名があるからだ。鉄禪と謝為何は、帰国後に現地の財団である共栄会から経済支援を受けて、設立準備を進めた。²³

(2) 成立記念式典

一九四一年一月五日、午前九時（現地時間）に、国際仏教協会華南支部の成立を記念する式典が始まった。鉄禪が住持を務める広東省広州市の六榕寺が式典会場となり、汪精衛などの中国と日本の要人が出席した。寺名は北宋の詩人蘇東坡の詠歌に由来し、著名な花塔が高くそびゆる名刹である。当日の式次第は、次のとおりである。

禮軌

一、雲集／二、鳴鐘鼓／三、肅立／四、恭請各長官各來賓就位／五、正副主席就位／六、擧香讚 主席拈香
禮佛／七、全體向 中日國旗 釋尊 總理遺像行最敬禮（三鞠躬）／八、全體遙向 汪主席致敬禮（一鞠躬）
／九、正副主席向 各長言各來賓行一鞠躬禮／十、宣疏／十一、主席致開會詞／十二、讀祝詞／十三、念佛
南無本師釋迦牟尼佛三稱無量壽讚／十四、請來賓演說／十五、本會答詞／十六、鳴鐘鼓／十七、禮成／十八、
拍照／十九、茶會²⁴

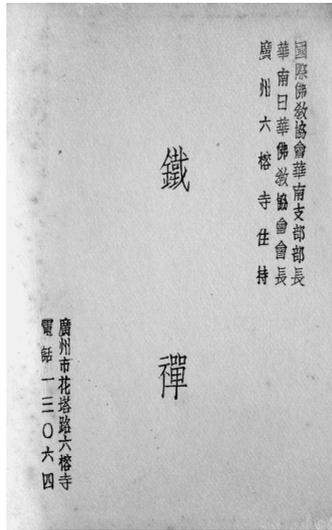
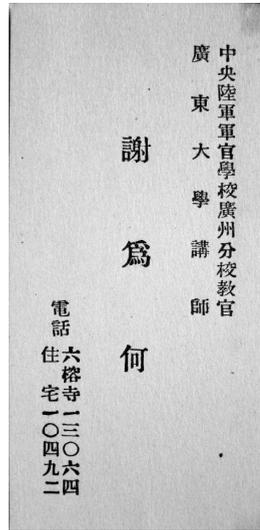


図2 鉄禪及び謝為何の名刺（大阪府高槻市、浄土真宗本願寺派正徳寺蔵）

と肩書は、鉄禪（国際仏教協会華南支部部長、華南日華仏教協会会長、広州六榕寺住持）、謝為何（中央陸軍軍官学校広州分校教官、広東大学講師）、明慧（華南日華仏教協会幹事、国際仏教協会華南支部、布教師、大仏寺）、劉西航（別名「耀岐」、国際仏教協会華南支部秘書）とある。²⁷ 既存の華南日華仏教協会と国際仏教協会華南支部が並立している。双方とも中国仏教からの対日協力組織であるが、前者は中日仏教者の連絡、後者は学術・教

華南支部は、六榕寺を拠点に活動が始まった。財政基盤を安定すべく、財団法人化も計画していた。謝為何は、式典後に東京麻布の協会本部宛へ電報で報告したが、²⁵ このことから、協会の幹部の出席はなかつたと見られる。華南支部は、協会の完全な下部組織というよりは、協会の趣旨に協賛して中国側でつくられた、独立性の強い団体であることが伺える。今後は協会本部と華南支部の協同で、発行図書頒布、仏教図書の交換、仏教関係ニュースの交換、相互使節の世話、中国語の仏教出版物の刊行を行うことになった。²⁶

一九四一年に、フランス領インドシナの訪問途上で広東に立ち寄った宇津木二秀（真宗本願寺派）は、華南支部の関係者と面会している。残存する遺品には、四点の名刺が確認できる。名刺に記載する氏名

育・文化工作に、役割が分化していったのである。

(3) 華南支部の賛助人

華南支部の設立記念式典では、小冊子『国際仏教協会華南支部会章』が配布された。末尾には、支部に賛同する二七名の氏名が記載されている。名簿は、横列三段組みの台形状になっており、組織の秩序が分かる。資料に記載される氏名を、原文のまま各段右から転記する。台形状に配置した原文名簿では、各段の中心線に要人を据えていることに留意されたい。

支部賛助人

- (上段) 坂口院長、齋藤隊長、矢崎機關長、陳主席(中央)、岩越部長、喜多總領事、作間部長(七名)
- (中段) 陳總理樹階、植會長梓卿、李委員勵文、彭市長、汪廳長(中央右)、王廳長(中央左)、林廳長、馮院長霖若、井上主事、陳經理思齊(一〇名)
- (下段) 胡頌棠先生、劉煥先生、王部長渭波、廖部長廣、孔理事長維新(中央右)、謝部長棟臣(中央左)、森清太郎先生、簡總經理坤、胡良玉先生、杜律師貢石(一〇名)

上段のうち中国人は、陳耀祖(広東省政府主席)の一名だけであり、同人の義兄(姉の夫)は汪精衛に当たる。他には矢崎勘十(広東特務機関長)、岩越寒季(南支那海軍特務部長)、喜多長雄(在広東帝国総領事)、作間喬宜(南支那方面軍参謀部付部長)が記名される。

中段には、行政の要人が並び、彭東原(広州特別市長)、汪宗準(財政庁庁長)、王英儒(民生庁庁長)、林

汝珩（教育庁庁長）らが見える。下段の森清太郎は、広東日本居留民会長を務めた人物だが、中国滞在歴が三十余年に及び、各地を踏査して複数の著述にまとめたが、自著の巻頭を飾る揮毫を鉄禪に求めるなど交遊があった。^{*28}

賛助人の日本人には、仏教者が存在せず軍官の要人が名前を連ねたことは、日本側主導の文化工作の組織であったことが明確である。

（4）鉄禪の第二次訪日

東京の大東亜会館で、一九四三年七月四〜五日に「大東亜仏教青年大会」が開催され、国内外から約五〇〇名が参加した。出席する鉄禪にとって、二度目の訪日である。会議の総会では、議長の安藤正純のもと、議案「青年仏教徒として大東亜戦争完遂に協力すべき実際的方法」など複数の審議が行われ、最後には「大東亜建設仏教宣言」が決議となり、仏教を通じた日本と東亜の連帯強化を目指すことになった。

国際仏教協会では、直前の七月三日に、東京芝の増上寺境内の三縁亭にて鉄禪の歓迎会を開催した。参加者は、外務省の矢野真、大東亜省通訳官の松村と五十嵐智昭、文部省宗務官の相原一郎介、仏教界から水野梅暁、加藤精神、協会側は会長井上哲次郎、理事の木村日記、長井真琴、宮本正尊、山本快龍、主事の吉水十果、調査部長の中島関爾であった。^{*29}

その頃には、東京で興亜宗教同盟主催「興亜宗教協力会議」が開催され、同年六月二九日に「宗教世界宣言」が出された。さらに一月五〜六日には、東京で政府による「大東亜会議」が行われ、中華民国の代表として汪精衛が出席する。時局の影響で「大東亜」をめぐる催事が続いた時期であった。

五 国際仏教協会華南支部の事業

(1) 組織と活動

前述の小冊子『国際仏教協会華南支部会章』には、支部の組織と活動に関する文書六件（規定五件及び計画書一件）を収めており、全一六頁になる。華南支部の事業を見るため要点を紹介する。

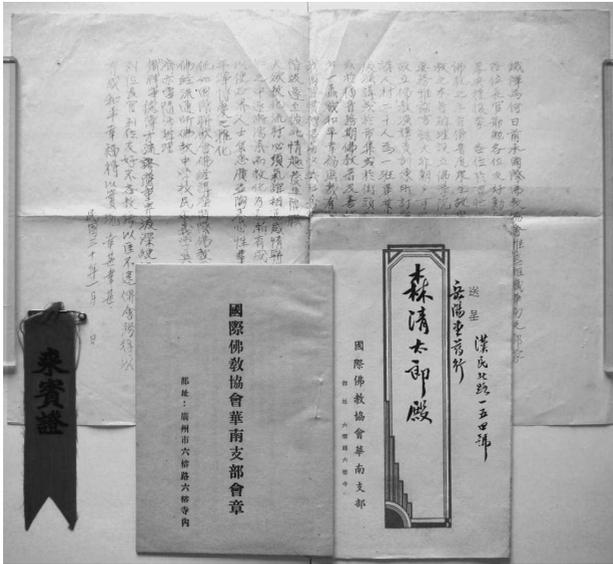


図3 成立記念式典の配布物（森清太郎旧蔵、筆者蔵）

① 「国際佛教協會華南支部會章」

華南支部の規程に当たり、構成は「第一章 総則」（第一〇二条）、「第二章 名称及会所」（第三〇四条）、「第三章 会員」（第五〇六条）、「第四章 經費」（第七〇九条）、「第五章 職員」（第一〇〇一二条）、「第六章 評議員」（第一三〇三条）、「第七章 會員大会」（第一四〇一五条）、「第八章 分部」（第二六〇一七条）からなる。目的について、「本支部以發揚佛教、普及國際、聯絡感情、務期世界共享和平幸福爲目的」（第一条）とある。海外に仏教を広める国際仏教協会の本部に準じた内容となっている。

華南支部が行う事業について、仏教演講員訓練所・平民義学学校・仏学研究所・仏学図書館・仏経流

通所・仏教講座・青年会館・仏教学院の設立、国際仏教連歓会の挙行の九つを定める（第二条）。このうち、仏教演講員訓練所、平民義学学校、青年会館、仏教学院の四つは、別途に規程を定めて小冊子に後掲する。

会員は、三種（普通会员、永久会員、名誉会員）あり、「凡入會會員、不分僧尼及男女居士、一律平等」（第六条丁）と定めるように、性別を問わず出家僧侶と在家信者が同じ資格で参加できる組織を目指していた。会員組織として支部の収入は、会費や寄附に依存しているが、注目すべきは「本支部經費、由政府補助」（第七条丁）とあるが、これは広東省政府から支援があったことを示すものである。役員は、名譽顧問・名譽董事長・名譽董事・董事長・董事・支部長・副支部長・評議長・評議員・秘書・幹事（第一〇条）が置かれた。

② 「國際佛教協會華南支部 佛教演講員訓練所招考學員簡章」

仏教講員訓練所の募集要項に当たり、全一〇条からなる。入所の条件について、「資格 凡年齡在二十歲以上、有中等學校畢業程度或有相當學歷經驗、而舌鋒敏捷、言語流利者爲合格」（第二条）、「員額 二十名」（第三条）、「修業期限 兩個月畢業」（第四条）、「入學手續 不分男女僧俗」（第五条）とある。つまり、僧侶又は信者を問わず、有望な青年男女で、しかも弁術が巧みな人材を求めて、二か月間に二〇名が学ぶ課程であったのである。給与について、「待遇 修業期間、每人每月津貼軍票二十元……畢業後分別錄取十名、每人每月薪俸軍票六十元以上」（第六条）とある。この軍票とは、日本軍が占領地で発行した紙幣（軍用手票）である。日本軍の工作に資するべく、仏教精神を通じて広東民衆にプロパガンダを行う要員の養成機関であった。

③ 「訓練所學員派遣工作計劃書」

前掲の仏教講員訓練所で訓練した人材の活用計画で、全一〇条からなる。趣旨は、「宗旨 擴大佛教教義宣傳、

本佛教之眞精神，破除一般愚痴之迷信，致力於世界和平運動，完成國際佛教大同」（第一条）という。宣伝方法は、「（一）定處宣講 在本市及各市縣設立講所。／（二）流動宣講 臨時指派各場所，如播音，學校，監獄，遊樂場，舟車路旁等。／（三）化裝宣講 照佛教本事編排戲等。／（四）文字宣講 編印講義或附屬圖書，以備演講員携帶出發演講，分派聽衆」（第三条）であつた。

④ 「國際佛教協會華南支部附設平民義學章程」

生活困難にある未成年者に対する教育機關の規程で、全一五条からなる。目的は、「宗旨 以救濟貧苦失學兒童，灌輸生活上所必需之知識技能，陶冶其性情，使養成爲善良之公民爲宗旨」（第三条）とする施設である。一〇歳以上の向学心のある男女に、六科目（国語、信札、算術、珠算、常識、仏学浅説）を無償で教育した（第七〇九条）。

⑤ 「國際佛教協會華南支部青年會章程」

青年会の規程で、全一一条からなる。目的は、「本會以聯絡佛教青年之感情，闡揚佛法，同時發展其個性，養成爲靈敏活發慈善耐勞之健全新青年爲宗旨」（第三条）とした。運動や学問、娯樂、読書を通して、青年への知識と徳性の涵養を目指した。

⑥ 「國際佛教協會華南支部佛教學院章程」

仏教學院の規程で、全一四条からなる。目的は、「本院之宗旨，係依照 教育部頒之教育宗旨辦理，除灌輸以生活上所必須之智識技能，及發展其個性，務使養成爲健全之公民外，並授以佛學知識，陶冶其慈善之性情，而造就佛學人才，藉以闡揚佛法爲宗旨」とした組織である（第三条）。修業年限は、初中部は三年、高中部は三年で

あり(第七条)、向学を目指す男女を受け入れた。

(2) 事業の実態

国際仏教協会華南支部の活動のうち、人材育成の実態を見る。仏学院の開設は、鉄禅の以前の希望で、第一次の来日時に「今度帰国後は日華仏教協会の事業とも関連して宿望の仏学院も興し、広く天下にさういふ志のある人物を求めたい」と述べていた^{*30}。宣伝工作要員を育成した仏教演講員訓練所については、「同支部の養成した仏教演講隊の活動は最近目ざましいものがあり連日三班に編成されて市内各処に演講会を開催し仏教精神に依る和平救国の大説法に多大の感動を各方面にあたへてゐる」と評された^{*31}。僧侶育成については、中日文化協会から三万円の補助金をもとに仏教学院を設立して、中国人布教師の育成を始めた。

学院附属の仏教図書館も始動して、華南支部副代表の笈潮風(真宗大谷派)が書籍の収集を担当することになり、大蔵経や辞典、仏教書などの購入援助や寄附呼びかけに当たっていた^{*32}。笈の斡旋と陸軍省の支援により、日本側から大正新修大蔵経百巻と国際仏教協会が収集した図書二百冊と共に送附された。広東における仏教の教育と研究の拠点を目指したのである^{*33}。

出版事業について、華南支部で初の刊行物は、謝為何による『仏教輯覧』であった。同書は「印度仏教」、「中国仏教」、「日本仏教」の三篇から成り、歴史的な経過と各国の現代仏教事情を中国語で要述したものである^{*34}。

なお、日中戦争前から広東仏教居士林が存在して謝為何は関与していたが、華南支部の発足後は、密接に関連して活動を再始動したと見られる。再開後には、居士林長に広東省財政庁長汪君直の兄汪祖沢が就任し、副林長には謝為何となった。広東省有力者の支援を受けて、一九四一年七月一三日に開林式を挙行したが、謝為何は「家庭に仏教を入れるのが主な目的であるが、一般社会事業にも乗り出したい」と語った^{*36}。

六 結論

鉄禅は、汪精衛政権下での対日協力を理由に、戦後の蒋介石政権で「漢奸裁判」に掛けられ有罪判決となった。懲役八年の判決を受けたが、後に懲役四年に減刑となるも、一九四六年九月二七日に獄中で死去した。

対日協力の真意について、現時点では来日時に日本人に向けて語った内容しか確認できず、その本当の意図は図りかねない。例えば、鉄禅は「日支は互にしつかり手を握つて行かねばならない兄弟の国だ。私は今回交驩使節として日本を訪問しましたが、日本の仏徒と手を握り日支提携東亜の新秩序建設に努力したい」と語っていた^{*37}。また「支那と日本とは同種同文の国で互ひにもつと親密になるべき筈だ。両国を合併してしまつてもよいと思つてゐる」と述べており^{*38}、中日の合邦論者に見えるが外交辞令であろう。

東福義雄（真宗本願寺派、評論家）との対談で、鉄禅は、「自分ははや弱体ながら、多少でもさういふ点で、（仏）法のため国のために役立つなら、生命を捨て、もといふ覚悟で、此度やつて来たやうな次第です。……汪主席は自分が教へたこともあり、今も親しくしてゐます」と述べて^{*39}、仏教界と新政権のため高齢ながらも敢えて来日したことが伺える。

汪精衛政権に関する先行研究では、同政権は日本に全面的な従属ではなく、複雑な政治力学の関係があつたことが、度々指摘されている。国際仏教協会華南支部も同じように、協会本部へ全面的に隷属したものではなかつた。例えば『中外日報』では、華南支部への批評として、「従来広東に於ける中華仏教界はやや日本仏教各宗の爲めに征服的境遇に有り自由な活動が出来なかつたが今春来「中華の仏教は中華僧侶の手に依つて」といふ新しい目標により国際仏教協会の華南支部が成立してから一段と活力を加へ^{*40}」たと評している。つまり日本占領下と

はいえ、中国仏教の独自性を出すべく、模索していたのが窺える。

日中戦争期の中国人仏教者には、単純に二分できない日本への迎合と反発をめぐる複雑な相克があったことが推察できる。そうした対日協力の僧侶たちの心裡に迫ることが、今後の研究課題である。

【注】

1 中村孝也『支那を行く』（大日本雄弁会講談社、一九四二年）、七二〜七三頁。

2 近年の主な成果に、広中一成「日中戦争初期華北における仏教同願会の成立と対日協力」（『東洋史研究』第七七巻第二号、東洋史研究会、二〇一八年、二三四〜二六五頁）、松谷暉介『日本の中国占領統治と宗教政策——日中キリスト者の協力と抵抗』（明石書店、二〇二〇年）がある。同書は労作であるが、表題及び本文全体で「政策」の概念を用いており、日本の対外関与は「政策」と「施策」に分けて議論すべきことを指摘した（拙稿「書評と紹介 同書」『日本歴史』第八七一号、吉川弘文館、二〇二〇年）。鉄禪は、坂井田夕起子『誰も知らない『西遊記』——玄奘三蔵の遺骨をめぐる東アジア戦後史』（龍溪書舎、二〇一三年、一七八〜一八〇頁）も触れる。

3 鉄禪の略歴は、主に下記を参照した。論考については、覚澄「我所知道的鉄禪和尚」（中国人民政治協商會議広東省委員会文史資料研究委員会編『広東文史資料』第八輯、広東人民出版社、一九六三年、一二〇〜一二八頁）、覚澄「関于鉄禪和尚与六榕寺若干資料」（広州市政協学習和文史資料委員会編『広州文史資料存稿選編』第十輯、華僑宗教、中国文史出版社、二〇〇八年）、張鳴皋「鉄禪和尚」（中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室編『中華民国史資料叢稿・人物伝記』第六輯、中華書局、一九七六年、一二〇頁）、「六榕寺・奸僧」（『収蔵・拍売』二〇一五年六期、広東教育出版社、六〇〜六二頁）。辞書項目については、「劉秀梅」（広東省中山図書館・広東省珠海市政协編『広東近現代人物詞典』広東科技出版社、一九九二年、一〇九頁）、「鉄禪」（張志哲編『中華仏教人物大辞典』黄山書社、二〇〇六年、一三二四頁）、「鉄禪」（徐友春主編『増訂版 民国人物大辞典 下』河北人民出版社、二〇〇七年、二八三四頁）。

- 4 「広東の日支僧侶提携し 避難の華僑に復帰慈惠を通電」^{てつ}河南日華仏教協会を組織 日支戦歿者慰霊祭を執行」（『日米新聞：The Japanese American News』第一四〇七六号、日米新聞社、一九三九年二月七日）、二頁。同記事は同盟通信社の配信。
- 5 「華南仏教協会飛躍／広州更生法要で糾合」（『中外日報』第二一八七四号、一九三九年三月二三日）、二頁。
- 6 「大陸でも軍馬祭」（『東京朝日新聞』第一九〇一〇号、一九三九年三月九日）、夕刊二頁。
- 7 「日華仏徒合力で広東に“仏学院”／華南日華仏教協会／第二回大会で決議」（『中外日報』第二二二七二号、一九四〇年三月一七日）、二頁。
- 8 「会員に白人も加る／広東の宗教連盟／日華提携で宗教工作／八雲義乘氏は語る」（『中外日報』第二二二一四号、一九四〇年一月一〇日）、二頁。
- 9 仏教大年鑑刊行会編『仏教大年鑑 一九六一年版』（同会、一九六〇年）、六〇一頁。
- 10 「日華両国は同種同文 一つにしていい」／仏教使節の特別任務帯び／巨僧鉄禪法師入洛／過去三十年間／受難の民国仏教／来朝第一日のページ開く」（『中外日報』第一二二九八号、一九四〇年八月一六日）、三頁。
- 11 前掲、「日華両国は同種同文 一つにしていい」、三頁。
- 12 前掲、「日華両国は同種同文 一つにしていい」に、「通訳に当たった弟子謝為何氏は明大政経科出身で極めて流暢な日本語で……老法師との対話を通訳」（三頁）とある。明治大学事務局編『明治大学一覽―付・卒業生年度別』（明治大学、一九三七年）及び興亜院編『日本留學中華民国人名調』（調査資料第九号、興亜院、一九四〇年）に、謝姓の人物は複数確認できたが同人は該当がない。「為何」は号であろう。
- 13 ラス・ビハリ・ボース著『革命の印度』（木星社書院、一九三二年）。波士〔Bose〕著、謝為何訳『革命之印度』（広東仏教居士林、一九三三年）。
- 14 旅程は、次の記事を参照した。「鉄禪和尚来朝」（『読売新聞』第二二八二五号、一九四〇年八月八日、朝刊三頁）、「鉄禪法師歓迎／東京市長招待」（『中外日報』第一二三〇〇号、同年八月一八日、三頁）、「鉄禪氏迎へ／日華仏教徒親善交驛」（『中外日報』第一二三〇一号、同年八月二〇日、三頁）、「鉄禪マイクに」（『読売新聞』第二二八五一

号、同年九月三日、朝刊七頁）、前掲『日華両国は同種同文 一つにしている』(三三頁)、「赴日隨感一 日本之仏教 鉄禅」(『華文大阪毎日』第五卷第一二期、一九四〇年、一四頁)。

なお、中国側の二次資料では、鉄禅の最初の訪日に際しては昭和天皇に謁見して大正新修大藏経が贈呈されたなどであるが、現時点では日本側の報道で確認できなかった。鉄禅の履歴は、更なる解明が必要である。

15 「支那高僧来朝／東洋平和を説く鉄禅師」(『読売新聞』第二二八三二号、一九四〇年八月一日)、夕刊二頁。

16 須磨弥吉郎『とき——須磨日記』(『日本スペイン協会内』)とき編纂会、一九六四年、一〇〇頁。

17 須磨弥吉郎『外交秘録』(『商工財務研究会』、一九五六年)、一九六頁。

18 小野賢一郎『茶わん随筆』(富士書店、一九四一年)、一四、鉄禅老師清歎 一三六〜一四〇頁。

19 「文人墨客の集ひ／鉄禅和尚困んで清談」(『東京朝日新聞』第一九五三六号、一九四〇年八月二〇日)、朝刊七頁。

20 「家庭の食卓へ／支那の精進料理／鉄禅和尚を喜ばした珍味」(『東京朝日新聞』第一九五三七号、一九四〇年八月二一日)、朝刊五頁。

21 無署名「ニューズ 仏教による日華提携 協会の広東支部長に鉄禅法師」(『海外仏教事情』第七卷第一号、「特輯 ビルマの仏教」、国際仏教協会、一九四〇年一月)、四一頁。

22 拙著『戦時下の日本仏教と南方地域』(法藏館、二〇一五年)、第一部第二章。

23 「南支に仏教提携／活躍の鉄眼和尚ら／広東国際仏協支部結成」(『中外日報』第一二三九九号、一九四〇年一月一八日)、二頁。

24 国際仏教協会華南支部編『国際仏教協会華南支部会章』(国際仏教協会華南支部、一九四一年)に添付された支部成立記念式典の式次第。当該の資料群は、筆者が二〇一三年に古書店から入手したもので、挙行式に招待された森清太郎の旧蔵品。

25 「華文機関誌の共同刊行を図る／国際仏協広東支部発会する」(『中外日報』第一二四一四号、一九四一年一月一日)、三頁。

26 無署名「ニューズ 国際仏教協会華南支部発会」(『海外仏教事情』第七卷第二号、「特輯タイ国の仏教」、一九四一

- 年二月)、五五頁。
- 27 浄土真宗本願寺派正徳寺(大阪府高槻市)蔵。宇津木二秀については、前掲の拙著『戦時下の日本仏教と南方地域』、第二部第一章を参照。
- 28 森清太郎『広東名勝史蹟——又名粵古稽眞』(岳陽堂業行、一九二二年)、(iii頁)。なお同書は『嶺南紀勝』(同、一九二八年)と改題して再刊されたが、冒頭には大谷光瑞筆「嶺南紀勝」の揮毫が追加された。版元は森が広東で経営した薬店。森岳陽(清太郎)『南華とはどんな処か』(大阪屋号書店、一九三二年)にある須磨弥吉郎「序」における森の人物紹介は参考になる。
- 29 無署名「内外日より 鉄禪師歓迎会」(『海外仏教事情』第九卷第四号、「安南特輯号」、一九四三年八月)、三六頁。
- 30 「現代支那の巨僧／鉄禪と語る／東福義雄」(『読売新聞』第二二八五一号、一九四〇年九月三日)、夕刊三頁。
- 31 「国際仏教協会華南支部」(『中外日報』第一二五三三号、一九四一年六月二七日)、三頁。
- 32 無署名「仏教図書館／広東に新設計画／日本教界の応援俟つ」(『中外日報』第一二四六一号、一九四一年三月七日)、三頁。
- 33 無署名「協会ニウズ 本会華南支部」(『海外仏教事情』第七卷第五号、「華僑の信仰号」、一九四一年二月)、五六頁。
- 34 謝為何「仏教輯覧」(『国際仏教協会華南支部』一九四一年)。「仏教輯覧」／『国際仏協華南支部初出版』(『中外日報』第一二五七七号、一九四一年七月二五日)、四頁。
- 35 前述、波士著、謝為何訳『革命之印度』。謝為何編著『広東仏教概況』(広東仏教居士林、一九四一年)。
- 36 「広東に仏教居士林」(『朝日新聞』第一九八五八号、一九四一年七月一日)、朝刊五頁。
- 37 前掲、「文人墨客の集ひ／鉄禪和尚囲んで清談」、朝刊七頁。
- 38 前掲、「日華両国は同種同文 一つにしている」、三頁。
- 39 前掲、「現代支那の巨僧／鉄禪と語る／東福義雄」、夕刊三頁。
- 40 前掲、「国際仏教協会華南支部」、三頁。